

フオントネル

——幸福なる知性——

加藤 林 太 郎

I

フオントネルの伝記作者であるアベ・トリュブレは、この作家の活動を二種類の分野に分けるのが、フオントネルの評価の上で適當であると考えた。即ち、(一) 感情 (sentiment) の必要な創作の分野 (演劇、詩)。(二) 知性 (Intelligence) のみでよい創作の分野 (哲学的、科学的作品) である。フオントネルの文学史上の評価では常に、この作家の活動を何らかの意味で二分し、区別するのが伝統であった。それは多く、才人^{ベレスクリ}と哲学者という区分であり、これは「メルキユール・ギヤラン」のにやけた寄稿家、ラ・ブリユイエールの描いたシディアスと、王立科学院書記長であるフオントネルとの間の断絶を説明するのに好都合であった。これはトリュブレの行った区分にそのまゝ対応するものであるが、フオントネルの求めていた創作活動の原理を考察するのに、やはり必要な区分であると考えられる。

II

フオントネルはこれらの二つの分野に就き、それぞれ考察を行っているが、第一の分類、就中、悲劇に対する彼の意見は屢々余りに論争的であり、結果的には不毛であると云えるようである。それらは「詩法に関する考察」⁽¹⁾、「フランス劇史」および「コルネーユの生涯」⁽²⁾（いずれも一七四二年）に見られるであろう。ところで、これらは殆ど常にラシーヌに対する攻撃である。この執拗な攻撃は、家系上の理由（ピエール・コルネーユの十七才下の妹マルトがフオントネルの母である）と共に、フオントネルの失敗作「アスパール」⁽³⁾（一六八〇）⁽⁴⁾に対するラシーヌの残酷なエピソード⁽⁵⁾（口笛でやじる習慣は、この劇の上演を機会に始まったと云うもの）への怨恨にも裏付けられていると考えられる。grand と tendre の比較は根気よく続けられ、数多い「比較」（parallèle）の中でも、最も公正さを欠いたものを生み出すこととなる。またフオントネルが確実な論議として繰り返すのは、悲劇における先導者としてのコルネーユに対する尊敬の強要である。彼の「詩法に関する考察」は、コルネーユの作品の分析により、悲劇の真の規則を提示するというものである。この批評態度は、古代人に対する尊敬を、あるべき位置に引き下げた（「古代人と近代人に関する小論」⁽⁷⁾（一六八八））合理主義者フオントネルが、模範として古代人の代りにコルネーユを据えただけのことである。実は、模倣（imitation）という文学の原理からは、何ら解放の意図がないことを示し、批評を徒らに生硬化させた点、非常に不毛であると考えられる。

フオントネルは劇ジャンルに対する見解に於いて、時に自ら、その無意味を告白しさえするのである。「詩法に関する考察」の結びに於て彼は、「こうした思考は、才能^{ジュニエ}を持たざる者に才能を与えるのではなく、また才能を有する者に対してはいくらも援けとなるものではない」⁽⁸⁾と述べている。もっぱら、理屈を立て、みるのが好きな人々にのみ向

いているのだ、と云うのであった。コルネーユは、越えて進むことは勿論、追隨さえも許さない巨匠であり、彼の創造した悲劇はコルネーユのみに独特の悲劇形式であるという見解と共に、或る種の天才論に外ならない。結局、フォントネルは、その悲劇論の多くに於て、創作理論の探究よりは、むしろ論争に関心を持つようであり、そこに独自の見解を見出すことは困難である。

III

フォントネルは、創造の才能を持たずに文学の世界に入ったのであり、そうした作家達が十七世紀に於てそうであった様に、彼も、ラシーヌ、ラ・ブリュイエールなどに容赦なく攻撃される、落伍した、戦々懼々たる作家とならねばならなかった。これらから結果してフォントネルは群小ジャンル (*pastorale, lettres galantes*) に謂わば安住の地を求めているかに見える。またトリュブレの推測によれば、喜劇が彼の最も好む文学形式である。喜劇を事実、彼はいくつか書いたが、自らも、これは上演に適さず、読むためのものであるとしている。しかし、その批評作品に於て彼の喜劇形式への好意は明らかに見てとれる。彼によれば「愛」は、悲劇に於いてよりも喜劇に於いての方がより容易に、より広く研究できるのである。そしてモリエールは *Le Bourgeois Gentilhomme* あるいは *Le Misanthrope* の作者として、(*La science du cœur*) の師たるべき人である。またその上に、我々が生来もっている模倣の才能は、我々の知っている物事に関係するところの喜劇に我々を向かわせるのである(「フランス劇史」)。

また一方に於て彼は、大ジャンルの文学が有するべき諸要素を激しく攻撃する。押韻 (*rimé*) に対する攻撃は十七世紀末の、詩、対散文の論争に関係を見出すことが出来るが、フォントネルの場合、文学からの離脱という傾向の中に於いて考えるべき現象の一つである。彼によれば、押韻の規則は全く勝手に決定されたものであり、押韻の価値は、

せいぜい *difficulté vaincue* として読者を驚かせる点にしか存在しない。詩は単に、韻をふんだ論文にすぎないのである。⁽⁹⁾

悲劇における崇高さも批判を免れない。⁽¹⁰⁾ コルネーユへの称讃にも拘らず、オラーヌのカミーユ殺害の行為は、その「極端な残忍さ」と「真実らしさの欠除」のため排すべきものに思える。コルネーユの主人公達は一般に、その高貴で崇高な性格のため、真実らしさを離れる危険に絶えず曝されているように思える。「シンナ」に於けるオーギュストの仁慈は、それが歴史上の事実であるためにのみ、承認を余儀なくされるにすぎないと述べている。但し、コルネーユの諸作品に彼が指摘するいくつかの欠点は、いずれも、コルネーユ自身が *Examen* に於いて指摘している事柄ばかりであるから、こゝに於いてコルネーユ讃美者としての彼の立場を自ら危くしているわけでは決してない。彼が真にコルネーユより独立し得るのは、劇の主題として、「愛」を、野心などの崇高な情熱より豊かなものとして主張する時、及びその愛が、絶望、不安などの強い作用を伴うものでなく、繊細で、むしろ幸福に近いものとして示されるべきだと考える時に始まるのである。彼は自己の劇作品の方向として、悲劇と喜劇の中間のジャンルを考え、ド・ラ・シヨッセ、デストウッシュに親近性を見出すのであり、この方向にのみ、彼の文学論は、将来への開放性を有していた。彼は、コルネーユ、ラシーヌの両者を含めて、強暴で、暗い情熱を主題とする悲劇に関心を抱くことが出来なかったのであると結論してよいだろう。

文学、少くとも十七世紀に於ける文学から離脱させる要素の一つと考えてよいものに、古代人に対する批判がある。フオントネルは常に、人間精神進歩の名に於て古代人を批判し（「古代人、近代人に関する小論」）、「対話」技法の上での模範と自ら呼んでいるルキアノスも、批判の対象たるを免れない。古代人の与えた規則は習慣にすぎないのではないかどうかを知る必要が今ではあり、それらを「理性の厳正な審判」にかけてみる必要があるのだ、と云うのであ

った。

フオントネルの文学に対する見解は、コルネーユ対ラシーヌ論争⁽¹³⁾という動機から来る偏狭さ、また文学に支配的な諸要素に対する無理解と敵意などから、彼と文学の間の遠さのみを示すものである様に思われる。

IV

彼はしかし、自らの進むべき道を見出し得たのであった。それは科学と哲学である。彼は新しい思想に貫かれた人々に特有の幸福感、あるいは歓喜の中に生きている。彼が科学院書記長となって以後行った、「物故会員頌⁽¹⁴⁾」は、その淡々とした調子の中に、新しい科学に接した人々の歓喜と情熱、時には明らかにカルテジアン⁽¹⁵⁾の喜びとも名付け得るものを描き出していることが屢々である。しかし、フオントネルに於て特徴的であり、真に彼の *faculté maîtresse* を為しているものは、*raisonner* する喜びであり、また、世界(宇宙)の新しい姿を表現することへの嗜好であった。

(一) 彼は *raisonnement* のために特別のジャンルを見出すのである。それはルキアノスを模倣した「対話」である。このジャンルは、例えばボワローによって既に用いられてはいるが、これに新しい使命を与えたのはフオントネルであったと云ってよい。この形式が、いかに、来るべき世紀の思考方法に適合し、甚しい隆盛を見たかは誰もが知るところである。*raisonnement* の喜びは、それが *ridicule* な議論ばかりの組合せとなる点に迄求められている。「死者達の対話」(一六八三)⁽¹⁶⁾の対話者達は、実にしばしば相手に対し、「何という理屈だ」とか「貴方の云われることほど極端なものはない」などと繰り返している。対話という形式は、こゝでは、逆説的議論の自由のために奉仕しているのである。

(二) 彼は、科学および新しい哲学の *vulgarisation* を試みる。彼の努力は第一に文体の選択に、そして第二に読者の

選択にあつた。そして前者は後者に従属する事柄である。

彼は女性のために書くのである。何故なら女性達是对立すべき如何なる他の思想も未だ抱いていないからだし、また彼女達は、たゞ聞こうとし、決して議論しようとはしないからである。その上更に、彼女達は、一度心に抱いた事柄には愛着するものであるから、と考えていたようである。

彼は一方、会話の文体で書くのである。扱われた主題と無関係な装飾は、「会話がもっている自由な性格」によって許容され、正当化される、と云っている。⁽⁹⁴⁾そして、論文(「神託の歴史」)の中に於いてさえ、読者と対話していることを想像して書いたと述べている(「神託の歴史」序)⁽⁹⁵⁾

V

しかし vulgarisation の理論は、まず、読者の好みに対する認識から来るのである。「我が国の大部分の人々は、精密な研究や、深遠な議論などの持つ力強い美に対すると同じく、云い廻しや、表現や、考え方などの面白さにも極く好みが強のである」(「神託の歴史」序)⁽⁹⁶⁾と云っている。そして更に、「就中、人は非常に怠惰なものであって、注意力集中は出来るだけ少くて済むよう、読む本の中には、ちゃんとした整理が為されていることを要求する」と述べている。

そして通俗化の理論は、またフオントネルの科学と哲学への愛情と共に、学者的な文体(style savant)に対し彼のいつも感ずる嫌悪から来るのである。「立派な題材を扱うということだけで十分」であるとし、「その形式に気をとめない」ことは許し得ないことであると考えている。彼の目には、全てのことを知っていて、かつフランス語をも知っており、これのよく書ける人は稀なのである。barbare ではなく、érudition というものは、あれば驚くべきものと思

えたのである。結局に於いて読者は誰も、よく分る説明と、良い云い廻しもいくらか、そして面白さなどさえ求めているのだが、それらを著者達は自分の扱う素材に与えることを怠っている、と結論するのである。ダランベールは後年フオントネルに就いて（百科全書序）「彼は学者達にペダンティズムの束縛を脱れることを教えた」と述べるであろう。

VI

我々は、これらの創作活動がフオントネルのうちにあって、「感情」の作品に十分とって代り得る豊かさを持つに至っていることを推測できる。そして彼自身、知性の作品に必然的に伴う種々の不安な要素、こうした創作活動が文学活動の等価物たることを妨げる諸要素に注意を払っている。

(一) その利己的な性格によるだけではなく、また純粹に哲学的で、知性の *douceur* の全く除かれた論争に陥ることを避けるため、彼は、*polémique* にならないよう用心を怠らない。フオントネルは決して議論しようとしなない。「私は全く *l'humeur polémique* をもっていない、⁽⁸¹⁾」と彼は云っている。「神託の歴史」の原著者ヴァン・ダルは、この良き反訳者が、ジェジュイットの攻撃に対し、沈黙を守っているのを不思議に感じたのであったが、これは必ずしも全面的に、政治的な慎重さから来る態度とだけ考えてよいものであろうか。作品の性格に注意することの方がよほど慎重なのであって、彼の基本的な態度は、発表はするが、絶対に論争に巻き込まれないという点にあると見てよいだろう。彼のこうした態度にも拘らず、こうした作品は結局、彼がある科学者に就いて云った様に、「この世界を支配している無知と偏見に対する陰謀」となるのではあるけれども。

(二) 彼は、文学に対する感性の代りに、伝うべき幸福感と歓喜とを有していた。彼は常にこの幸福感（哲学上の、あ

るいは科学上の)は、「選ばれた少数の人々」にしか伝え得ないものと信じていた。しかし重要なのは、作家と読者という関係が、そこには存在しているということである。そして *vulgarisateur* の特権として、彼がレムリイへの頌で述べた様に、彼は常に自分用に知識の幾分かは取っておけるのであって、彼は望むだけ何度でも、そして決して涸渇することなく、陽気な議論、および説明することの甘美さに立ち戻ることが出来るのであった。

哲学と科学知識は、この様に、フオントネルのもとにあっては、ひとつの、知的でありながらも甘美な喜びの、尽きることのない源泉であった。作者は創造の喜びと読者とを持っている。それは文学と類似した姿をもつ何ものかである。文学に科学を採り入れた、あるいは科学の説明に文学の形式を借りた、とこれを説明するのは構造の説明としては、いずれも正しいものであろう。しかし、これは、そうした単なる組合せに還元できない個有の成立過程を有するものではないだろうか。

VII

これを文学と名付けることが出来るならば、フオントネル個有のこの文学に対する理論は次の様に要約できるであろう。即ち(一)哲学的、科学的作品を *vulgarisation* の領域にとゞめ、それらが決してこの限界をこえて、*polémique* の領域に入らないようにすること。彼が読者達に伝えようとしているのは、熱心を守るべき真理ではなく、むしろ思想のもたらず幸福感なのである。(二)文体に対する配慮。これによって彼は、科学上の思考と知識とを、殆ど文学的な領域に導き入れることに成功したのである。

フオントネルはこうして、*intelligence* の、あるいはむしろ *lumière* の文学の方法を創始したのである。タンサン夫人がフオントネルの胸を指さして、貴方はこゝに心臓の代りに脳髓を持っているのですね、と云った時、彼女はそ

の友人の作品の中に、純粹に知的ではあるが、しかし感情の世界と同じだけの喜びと力とを有するひとつの世界がたしかにあると思つたのに違ひないのである。

ナキペン＝Oeuvres de Monsieur de Fontenelle ; Librairies associées, 11 vol. ; 1758-1761.

註(1) Réflexions sur la poétique (1742) (œuvres, tome III)

(2) Vie de M. Cornelle avec l'histoire du théâtre français jusqu'à lui (1742) (œuv. tome III)

(4) Aspar (1680)

(5) Sur l'Aspar de M. de Fontenelle. L'origine des sifflets (Théâtre complet de Racine, Classiques Garnier, p. 718)

(6) Parallèle entre Racine et Corneille (œuv. tome IX)

(7) Digression sur les anciens et les modernes (1688) (œuv. tome IV)

(8) œuv. tome III, p. 207.

(9) œuv. tome III, p. 136. (Réflexion sur la poétique)

(10) Sur la Poésie en général (1751) (œuv. tome VIII)

(11) Réflexions sur la poétique.

(12) Préface générale de la tragédie et des six comédies de ce recueil (œuv. tome VII)

(13) F. Deltour : Les ennemis de Racine au XVII^e siècle (Paris, 1859.) 參照。

(14) Eloges des Académiciens (2^e édition, 1708) (œuv. tome V, VI)

(15) Dialogues des Morts (1683) (œuv. tome I)

(16) les Entretiens sur la Pluralité des mondes, préface. (œuv. tome II, p. 5)

(17) Histoire des Oracles, préface. (œuv. tome II, p. 208)

(18) ibid. p. 202

(19) Eloge de M. le Marquis de l'Hospital (œuv. tome V, p. 91)

(20) Mémoires pour servir à l'histoire de la vie et des ouvrages de M. de Fontenelle par M. l'abbé Trublet. (œuv. tome XI, p. 155)

(21) Eloge de Lémery (œuv. tome V, p. 396)

(22) (文学部助手)